

2022年7月10日 説教「わたしの霊を注ぐ」

ヨエル書2章21～29節(2:21～3:2)

今朝は6月の静思の時カレンダーで読み、ペンテコステとも関連あるヨエル書から学んでいきます。

1. 楽しみ喜べ(21～24)

①恐れるな(21～22)「地よ。恐れるな。楽しみ喜べ。主が大いなることをされたからだ。野の獣たちよ。恐れるな。荒野の牧草はもえ出る。木はその実をみのらせ、いちじくの木と、ぶどうの木とは豊かにみよる。」ヨエルの働きはユダのヨアシュ王(紀元前839～800)の治世下のことだと考えられます。王国は平穏で、偶像礼拝も下火でした。この書には「主の日」という言葉が多く出てきます。また、いなごの襲来で民は疲弊しきっていました。神は民に悔い改めを迫ります(2:12-14)。そして、主は「穀物と新しいぶどう酒と油を送る」(19)と約束してくださいます。そしてここに、「恐れるな、楽しみ喜べ」と言われるのです。疲れて心が下向きになっている地の民に励ましの言葉です。ここにはその理由として、主が大いなることをされたのだからとあります。それは、野の獣たちへの言葉の中にも明らかです。すなわち、「恐れるな」と励まされた後に、「荒野の牧草は萌え出る」とあり、いちじくやぶどうの木も豊かな実を实らせることになると言われるのです。荒れた地にある者たちには心強かったことでしょう。

②初めの雨、後の雨(23)「シオンの子らよ。あなたがたの神、主にあつて、楽しみ喜べ。主は、あなたがたを義とするために、初めの雨を賜り、大雨を降らせ、前のように、初めの雨と後の雨とを降らせてくださるからだ。」さらにシオン(エルサレム)にいる人たちに呼びかけ、彼らの神であり主にあつて、楽しみ喜べと繰り返されます。人はどん底に落とされた時に、当たり前のことが恵みであるとわかるのです。太陽の光もそうですが、ここでは雨が降るといふ恵みです。「初めの雨」というのは麦まき前の秋(10～11月)の雨、後の雨というのは麦の実りを豊かにする春(3～4月)の雨です。以前と同じようにこのような雨が恵まれるというのです。ここで「あなたがたを義とするために」とあるのは、神との関係を正しくするためにといった意味であると考えられます。

③打ち場と石がめ(24)「打ち場は穀物で満ち、石がめは新しいぶどう酒と油であふれる。」打ち場というのは打穀するための平坦で円形の場所で、風通しの良い場所です。そこで、穀物を動物に踏ませたり、道具を用いて、打穀するのです。今ここでは、その打ち場に穀物が豊富にあることが示されています。さらに石がめの中には新しいぶどう酒や油という、重要な食糧、食材が備えらえるというのです。果樹や畑の実りが示されているのです。

2. 永遠に恥を見ない(25～27節)

①いなご、ばった(25)「いなご、ばった、食い荒らすいなご、かみつく

いなご、わたしがあなたがたの間で送った大軍勢が、食い尽くした年々を、わたしはあなたがたに償う。」ヨエル書1:4にいなごやばったの悪さが記され、ここでは農作物を食い荒らすいなご、ばったの大軍が食い尽くす様と、それを償うという主のお言葉が伝えられます。

②飽きるほど (26)「あなたがたは飽きるほど食べて満足し、あなたがたに不思議なことをしてくださった、あなたがたの神、主の名をほめたたえよう。わたしの民は永遠に恥を見ることはない。」麦などの畑の収穫ができず、さまざまな果樹の木が枯れ、人から喜びが消えていたのです(1:12)。それが、飽きるほど食べて満足するほどになると。それは不思議なことでした。だからこそ、「あなたがたの神、主をほめたたえよう。わたしの民は永遠に恥を見ることはない」とありますが、食物と言う、肉体が日々に必要なものが、豊かに備えられる喜びは主なる神をたたえることと、深い関連があるということです。

③イスラエルの真ん中に (27)「あなたがたは、イスラエルの真ん中にわたしがいることを知り、わたしがあなたがたの神、主であり、ほかにはないことを知る。わたしの民は永遠に恥を見ることはない。」イ主なる神を主とするときに、彼らは生きるのです。つまり、主なる神は、彼らが生きるために不可欠な方で、この方に頼っていくならば、後悔することなく、喜びをもって生きられるというのだ。

3. わたしの霊をそそぐ (28~29 節)

①霊を注ぐ (28)「その後、わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ。」ヘブル語聖書では(新共同訳聖書はそれにしたがう)、ここから3章になります。主はその「霊をすべての人に注ぐ」と言われるのです。これは文脈からみていくならば、神に信頼するすべての人に霊を注ぐということです。

②息子、娘、年より、若い男 (28)「あなたがたの息子や娘は預言し、年寄りも夢を見、若い男は幻を見る。」すべての人のなかには、年若い人もいます。「あなたがたの息子や娘」に霊が注がれて、彼らは預言をするのです。つまり、神から御言葉を預かって語るということです。また年をとった人も夢を見るといいます。彼らにも霊が注がれて、将来を予見するような夢を見させられるということです。

また若い男も御霊に満たされて、幻を見るということです。あのペテロが見た幻は、天上から大きな四隅をつるされた敷布が降りて来て、あらゆる種類の動物や鳥などがそこに入っていたというものでした。主はそれをほふって食べよと言われるのです。できません。神がきよめた物をきよくないと言ってはならないといった問答をします。それは異邦人の救いが示されていたのです(使徒10章)。

③しもべ、はしためにも (29)「その日、わたしは、しもべにも、はした

めにも、わたしの霊を注ぐ。」その日には、この世の立場においては、疎んじられやすい、しもべやはしためにも、主の霊を注ぐというのです。主にとっては、人種、立場、境遇などなどは問題ではないのです。主は公平な主なのです。主の恵みは、この世の基準とは違うところに働き、聖霊は注がれるのです。

《結論》28~29 節にある「わたしの霊をすべての人に注ぐ」以下は、「使徒の働き」2章のペンテコステの出来事において、使徒ペテロが語った説教のなかで引用されています。聖霊降臨によって使徒たちが、他国の言葉で話し出した時に、集まった人々は彼らを酔っていると聞いたのです。それに対して、ペテロは彼らが酔っているのではないことの証明として、ヨエル書における預言を示し、その成就がここにあると伝えていきます。

ヨエル書において、この部分はクライマックスの一つになっていますが、民はいなごやばったの襲来に苦しみ、畑は荒らされ、果樹は枯れて実はず、火は荒野の牧草地を焼き、水の流れは枯れるという試練を受けたのです。民の喜びは消えてしまいました。民はもだえ苦しみました。そんな時に主は、「主に立ち返れ」「着物ではなく、心を引き裂け」というように、悔い改めを促されました。主が情け深く、憐み深い方だから、主の前に出なさいというお告げでした(2:12~14)。この悔い改めを前提として、主は「地よ。恐れるな。楽しみ喜べ」と命じられるのです。そして、畑や果樹は命を取り戻し、実りが豊かに与えられるという約束がなされたのです。お腹を空かせていた人々に、食が備えられていくというのです。

そうした祝福の根幹には、主への賛美がありました。主を主とする信仰がありました。先日の野ゆり会においても、聖霊に働いていただきやすいようにするにはどうしたら良いかということを中心に考えました。その中に、主を賛美し、祈り、み言葉に立ち返るということがありました。まさに、ここにも「わたしがあなたがたの神、主であり、ほかにはないことを知る。わたしの民は永遠に恥を見ることはない」という御言葉にもつながります。

そのような主を仰ぎ見る信仰が結集されるときに、あのペンテコステの時もそうでしたが、「霊が注がれる」素地となるのです。そうなれば、もはやこの世の年齢、地位、立場、人種などなどは関係なく、聖霊がくだるのです。

水野源三さんは瞬きの詩人と言われましたが、体を動かすことも話すこともできませんでした。伝道者に導かれてキリストを知り、多くの詩や短歌を残しました。瞬きで語り、家族が読み取っていったのです。

「キリストにお会いしてから」という詩です。「戸をかたく しめきっていた 部屋に入って来られた キリストにお会いしてから その両手とわき腹に 傷跡がいたいたい キリストにお会いしてから 私の心が変わった 信じない者にならずに 信じなさいと言われた キリストにお会いしてから 私の心が変わった お会いしてから 」 まさに人々から相手にされなかった水野さんの内に聖霊が働いてことが広がっていったのです。キーウの長老教会も大変な試練のなかに、主は働き祝福されています。人間の物差しは別です。試練のただなかに、主を真摯に仰ぐ時に、聖霊は豊かに働いてくださるのです。人間的になるのではなく、聖霊の働きに期待しましょう。主は弱く力のない者たちにも働き、用いてくださるのです。この真理を学びましょう。この弱い群れのなかに、聖霊が豊かに働いてくださいますように。

そのためにもともに主をともに賛美し、心を合わせて祈っていきましょう。